

主 題：主にある家庭生活：夫と妻

聖書箇所：コロサイ人への手紙3章18節

テーマ：神様から妻に与えられた責任とは何か？

今朝、皆さんと一緒に考えたいのは、タイトルにもあるように、“主にある家庭生活：夫と妻”についてです。これから私たちは家庭生活、家族についてみことばから一緒に学んでいくのですが、今の私たちの社会において、家庭生活、家族は崩壊の危機に陥っています。大げさな話ではありません。実際にいろいろな場面で、伝統的な核家族の姿や結婚の形が現代社会のさまざまなものによって、ねじ曲げられ、歪められています。また、その結果も悲惨です。日本でも3組に1組の夫婦が離婚しているという現状が存在していると言われてますし、また、家庭において、反抗的な子どもが起こす問題や育児を放棄する親の事件なども頻りに耳にすることがあります。家庭生活は今大きな問題を抱えているのです。そして残念なことは、これは周りの社会だけの話ではないということです。教会の中にもそういった間違った影響が入り込んでいます。クリスチャンの交際や結婚、クリスチャンの家庭や子育てというものが、世の影響を受けたことによって問題を抱えるようになっているのです。だからこそ、私たちはこれからコロサイ3：18-4：1の部分を見ていきますけれども、ここに教えられているみことばが教える家族の姿というものをいま一度考えてみたいと思います。きょうは妻について、来週は夫について考えます。その後、親と子について、そして最後に、今の私たちには余りなじみのないように思える主人としもべについて、この順番で考えていきたいと思います。ぜひ自分自身のこととして考えてみてください。

▷覚えておいてほしい二つのこと…

そして、内容を見ていくに当たって、まず二つのことを覚えていてほしいと思います。

1) 私たちは最も親しい関係においても主の栄光を現そうとする

これは、どういうことかと言うと、今、私たちはコロサイのみことばを続けて学んできていますけれども、以前に見た15-17節の部分で、パウロはキリストに焦点を置いて話してくれていました。キリストの支配というものに身をゆだねて生きていくことを考えました。信仰者ひとりひとりがキリストの平和やキリストのことばに支配されるだけではなくて、神様の栄光をひとりひとりがすべての面において現して生きていこうと、そのことを考えました。そして、それは私たちひとりひとり個人個人の話ではなくて、神の家族として、教会としてその目標を目指して一緒に歩いていくことを見ました。ですから、信仰者ひとりひとりが、そして神の家族がその目標を目指して、キリストにあって歩み続けていくことを考えました。でもみことばが求めていたのは、それだけではなかったということです。覚えていてほしいのは、神様に召し出された家族だけではなく、もっとも身近な肉の家族、肉親の家族においてもみことばはそれを求めていくようにと教えていました。18節から4：1を続けて見ていくのですが、先に見ていただいて、ここに“主”ということばが何回登場しているか数えてください。18節、20節、22節、23節と4：1に1個ずつ出てきます。そして24節には二つです。この短い箇所のほとんどすべてに“主”ということばが7回繰り返されていたのです。家庭生活を教えているこの箇所に、“主”ということばが7回登場している。それは、家族の中心には“主”がいるということです。夫婦関係においても、親子関係においても、そこには主の権威に支配された関係を築いていくことが求められているということです。

また、そういった最も親しい関係において、私たちは主の栄光を現す者として歩み続けていくのですが、それは非常に重要なことでした。私たちは神の家族だけでなく、親子関係においても、夫婦

関係においても当然のように主の栄光を現していくのです。でも、それは欠かせません。どうしてかという、それは私たち自身がよくわかっているように、家庭の中において、本当の自分の姿が現れるからです。私たちはいろいろな仮面を着けて外を出歩くことは容易にできます。仕事場に行く時は仕事場に行く仮面を着け、教会に行く時は教会に行く仮面をつけて、また買物に行く時は買い物に行く時の仮面を着ける。そうやっていろいろな仮面を着けることは容易にできるのです。でも家に戻って家族と一緒にいれば、私たちはそこに安心感を覚えます。そして、そこに本当の自分の姿が現れるのです。ですから、最も親しい関係を見て取るならば、私たちはそこに私たちが実際にどんな存在なのかということ、そしてそこに私たちの霊的成熟さすらも見て取ることができるのです。だからこそ、私たちはこれから最も親しい関係についてみことばを考えていきます。そしてそのことを理解していく上であって、果たして自分自身が夫婦関係において、親子関係において、家庭の中において主の栄光を現しているのかどうかをよく考えてみてください。そして考えるだけではなくて、ともに主の栄光を現す者として成長していきましょう。

2) 私たちはデザイナーの意図に従おうとする

また二つ目に覚えていてほしいことは、私たちはデザイナーの意図に従おうとするということです。言いかえると、結婚であろうが、家庭であろうが、そのすべてを創造された方、創造主なる神様が最初に持っていたご計画に、私たちは従うことが大切だということです。これから私たちがみことばを通して考えていこうとすることは、私たちの考えでも、この社会の教えや文化でもありません。私たちが見ていくものは、この世界を最初に創造された創造主が初めから持っておられたオリジナルの計画です。ですから、神様が、デザイナーが何の目的でもって、どのようなものとしてそれを造ったのか知る時に、私たちはそこに心を留めるのです。これはとても大切なことになります。今、私たちがニュースをつけたり、本を読んだり、ネットを調べれば、最初のデザイナーが意図したものは全く違うものがあふれかえっています。私たちの責任は、デザイナーが意図したものに目を留めることです。ですからぜひこうしてみことばを見ていくのですけれども、問い続けてください。神様は一体どんな目的でこの関係を造られたのか、そして果たしてそれに自分自身は当てはまっているのだろうか。果たして自分自身はそのような者として成長し続けているのだろうかということを考え、祈り続けてください。

ですから、これから少し時間はかかりますけれども、家庭生活を見ていきますから、ぜひ続けてみことばに耳を傾けてください。

では、まず18節から4:1まで流れを理解するために読みますので、ごらんください。

コロサイ3:18-4:1

「:18 妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。:19 夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけません。:20 子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。:21 父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。:22 奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、主を恐れかしこみつつ、真心から従いなさい。:23 何をするにも、人に対してではなく、主に對してするように、心からしなさい。:24 あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。:25 不正を行う者は、自分が行った不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません。4:1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。」

○夫婦間における妻の責任：夫に従うこと 18節

さて、ではまず家庭における妻の責任について改めて考えてみたいと思います。もちろん妻について言われているので、妻の皆さんはよく考えてください。ただし、それ以外の方々もよくみことばに耳を傾けてください。まず、妻の責任が18節にはっきりと記されていました。18節をもう一度見ると、こう

書いていました。「妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。」と。妻に与えられていた責任は、夫に従うということでした。家庭にあって、夫のリーダーシップに従っていくことが妻に託されていた大切な務めだったのです。でもこの“従う”ということを知ると、多くの人たちはネガティブな印象を持ってしまふことがあります。どうして夫に従わないといけないのですか、夫の奴隷か召し使いになれと言っているのですかと。聖書は夫より私の方が劣っていると言っているのですかと。また、残念ながら今の社会や文化においても、特に夫に従うという考え方自体は薄れていっています。学んでいた中で見つけた記事の中の一つに、こんなことばが記されていました。「夫を立てることは必要ですが、夫に従う必要はありません。……言いたいことは言うけれど、相手に合わせて柔軟な態度も取れる妻。さらに、柔軟な態度を取ることで、夫に「貸し」をつくり、根っこのところでは優位に立つような駆け引きができる妻が、令和の「夫を立てる妻」です。」と。何ということが書かれているのでしょうかと思いますよね、私たちは。でも、立ち止まって考えてみてください。このようなことがいろいろなところにあふれているということです。

では、みことばがそうやって夫に従いなさいと言った時に、それは妻というのが夫に劣っているから、召し使いのようになりなさいと言っていたのでしょうか？こういった駆け引きのできる妻になることを神様は望んでいるのでしょうか？もちろん答えは違いました。この世界のすべてを造られたお方、結婚というものを最初に定められた神様は、そんなことは求めていませんでした。すべてのデザイナーであられる知恵ある創造主は、夫婦間において妻の従う姿を求めていました。そして求めていただけでなく、従うということがどういうことなのかをみことばを通して描いていたのです。では、それがいったいどういうものなのか？妻が夫に従うということに関する責任に関してよく理解したいので、きょうは四つの質問を投げかけながら、このことについて考えてみたいと思います。

1. 意味：“従う”とはどういうことか？

これもシンプルな質問です。妻が夫に従うというのは、そもそもどういう意味で言われていたのでしょうか？そのことを理解するために、もう一回、18節に戻ってよく読み取ってみましょう。18節には「妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい」と書いてありました。少なくとも三つのことを読み取ることができます。

まず一つ目に読み取れるのは、この箇所が「妻よ」ではなくて、「妻たちよ」という複数形で呼びかけられていたことです。言いかえれば、これはこの箇所の内容がある特定のひとりの妻に当てはまることではなくて、イエス・キリストを信じるすべての妻に対して語られていたということです。ですから、イエス・キリストを信じているすべての複数の妻にこのみことばは当てはまり、例外となる妻はいないということです。

二つ目に見て取れることは、ここで用いられていた動詞、「従いなさい」ということばには継続を表す現在形の命令が使われていました。これは、従うというこの行為は妻がふと思立った時にするものでも、気が向いた時に時々するものでもなかったということです。従うということは、いつも常になしていること、妻にとっての生活そのものだということでした。

そして三つ目に見て取れることは、今見ましたけれども、ここで出てきていた「従いなさい」ということばの意味には、非常に興味深いものを見て取ることができました。このことばはもともと「何かの下に」を表すことばと、「整列する」、「並ぶ」を表す二つのことばが一つにくっついてできていたことばでした。そしてここからこのことばは、「何か権威あるものの下に整列する」とか、「そのものにみずからを従わせる」といった意味で用いられていました。これがポイントです。聖書注解者のひとりダグラス・ムーアという人物も、このことばを次のようにわかりやすく説明していました。「服従とは、相手を認め、そのリーダーシップの下に自分自身を置くという自発的な意志を示唆するものです。」と。最後に、「自発的な意思を示唆するものです」とありました。覚えてほしいことは、この「従いなさい」ということばは、

自発的なおのれの意志を表しているということです。多くの人たちはこの`従う`ということばを聞くと、すぐにだれかの命令や指令に強制的に従わせられるような様子、もう渋々、嫌々ながらそれをしないといけない、そんな姿を思い浮かべるかもしれません。でも、ここでみことばが教えていた`従う`ということばは、だれかに強いられたからするものではありませんでした。ましてや嫌々ながらするものでもありませんでした。夫が妻に対して従えと言うからするものでもありません。このことばは、自分自身がみずからの意志でもって自分から喜んで、進んでそれを行いたい、行おうとすることを表していたのです。

当然これは妻が夫に比べて劣っているから、そうするものではありません。というのも、実際この`従う`という同じことばは、聖書のほかの箇所にも使われていたのですけれども、その一つがイエス様の姿を描くの用に用いられていました。ルカ2：51にこんなふうに書いていました。「それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。」。ここで出てきていた「両親に仕えられた」と訳されていることばが`従う`と同じことばになります。イエス様の姿を思い浮かべてみてください。イエス様は、両親に比べて何か劣っているから、嫌々従われていたのでしょうか？そうではありませんでした。ましてや神の御子としてこの地上に来られたイエス様こそ、すべての人によって仕えられるべきお方でした。イエス様が両親の前に立って、「私こそ神の御子です。ご存じのとおり、世の罪を取り除くために来たのが私です、救い主です。お父さん、お母さん、あなたたちは罪人ですから、私に従いなさい」と口にすることもできたのです。それが事実でした。でも、イエス様はそうはなさらなかったのです。そんなお方が自分の意思でもってへりくだって、神様の立てた親の権威に喜んで従われていました。それが妻に求められていた`従う`と同じだということです。家庭において、妻に与えられていた責任は、夫に従うということでした。嫌々ながら不平不満にあふれて、気が向いた時だけ時々するものではありません。神様が立ててくださった夫に対して、だれかに言われたからではなく自分から喜んで従っていきこうとすることです。それがこの`従う`ということの意味でした。それが結婚を定めた神様の求めておられた妻のあるべき姿だったのです。

2) 理由：“従う”とはどうしてか？

でもこれを聞いていると、もしかしたらある人はこんなふうにも思うかもしれません。聖書の言うことはよくわかりました。自分から進んで夫に従っていくことを神様が望んでおられることもわかりました。そして私もそうしたいのはやまやまなのです。ただ私の夫は喜んで従うのが非常に難しいのです。あなたは教会の姿しか見ていないからわからないかもしれませんが、家での夫の姿を知れば、いかにそれが困難なことかわかるはずですよ。私にはその家の姿はわかりませんが、どんな時も喜んでみずから仕えていくことには間違いなく困難が伴います。実際、各家庭で抱えている葛藤や難しさというもので、悩んでいることもよくお聞きすることはあります。でも、それを踏まえた上で、次に二つ目の質問を考えてみてください。二つ目の質問は、どうして従うのかということです。

神様はなぜ妻が夫に従うようにと命じられたのでしょうか？すべてをご存じの主は、なぜ妻が夫に進んで仕えていくことを求めていたのでしょうか？それには理由がありました。そしてその理由をも神様はみことばを通してはっきりと教えてくれていました。それを正しく理解するために、別の箇所を見てみたいと思います。エペソ5：22-23にその理由がわかりやすく教えられていました。こうして私たちは十分に完全なみことばを、いろいろなところと見比べることによって、神様の言われているみこころをよく理解することができます。そこには「:22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。:23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。」と書かれていました。どうして妻は夫にそもそも従うのか――。その理由は、夫が妻のかしらであるからでした。神様は家庭において、夫をかしらとして、リーダーとして立てられていたからこそ、そのリーダーシップに妻は従おうとすることです。そして、それが創造の初めから神様の持

っておられたご計画でした。どういうことかと思ひ返してみてください。神様はアダムを先に、そしてその後エバの順番で造りました。エバを造る前に、神様はこのように言われていたのです。創世記2：18に「神である【主】は仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」と書いています。こうして男性と女性というのは、別々の役割を担うものとして創造されました。神様は夫にかしら、リーダーとしての役割を、妻にその夫を支える助け手としての役割を与えられていたのです。男性と女性、そこに優劣があるという話ではありません。ましてや妻は夫の奴隷や召し使いでもありません。ただ、神様はそれぞれに異なる大切な務めを任されていた、託されていたと言うのです。それがすべての初めから創造主であるお方が持っておられたご計画でした。だから妻は、夫が何かではなく、夫ではなく、ただその主のご計画が言っているから、その主のご計画に従ってかしらである夫に喜んで従うことが欠かせなかったのです。

さて、少しそれぞれ自分のこととして、特に妻の皆さんは自分の歩みを振り返って考えてみてください。ここでみことばは、夫は妻のかしらだと言っていました。妻が夫のかしらとは言われていませんでした。でも、果たして日々の生活の中であって、それぞれの家庭であって、実際にかしらとしてふるまっているのはだれでしょう？ここで注目してほしいのは、夫が妻のかしらですと言われていた時、みことばは夫に何らかの条件を付け加えていなかったということです。ここでみことばは、真面目な夫は妻のかしらですとは言っていませんでした。忠実に家庭を導こうとしている夫は妻のかしらですとも言っていませんでした。そうではなく、ただ夫は妻のかしらですと述べていたのです。とすると、言いかえれば、たとえ優柔不断な夫であったとしても、リーダーシップを発揮しないような夫であったとしても、多くの失敗をしてしまって、あなたを何度も何度も悲しませるような夫であったとしても、神様の立てた夫であるのであれば、その夫はあなたにとってかしらだということです。これはとても大切でした。忘れてはいけません。妻が自分の都合によって夫をかしらにするのではないということです。だれがかしらにしたのか——。それは結婚を定めた神様ご自身がかしらとしての夫を、妻に対して、あなたに対して与えたということです。

時に、こんな考えを持っている人に出くわすことがあります。実は、夫がリーダーとしての役割を全然果たそうとしないのです、頼りないのですよ、だから仕方なく私がおの代わりをしないといけません。もちろん、夫がその役割を果たすのを拒んでいるのであれば、それも大きな問題です。その点は別にないがしろにするわけではありません。むしろ来週、夫の責任についてはしっかりと触れたいと思います。でもここで言われていたことは、もしかしらでもない、助け手である役割の者が勝手にかしらの役割を夫から奪おうとしているのであれば、それは大きな問題だということです。神様が最初に定めておられたご計画をノーと言うのであれば、それは神様の計画にみずからが逆らっていることになるのです。そのような態度は、神様に向かってこう言っていることと同じになります。「神様、あなたが私にリーダーとして与えてくださったあの夫は全然足りていません。」、そして何より「最初に定めたあなたのご計画は、私には不十分です。だから代わりに私がおの役割を担いたいと思います。」と。これは非常に高慢だと思いませんか？そして、もし妻がかしらである夫に従わないという選択をするのであれば、その根底にある問題は、妻と夫との間にあるのではなく、妻と神様との間にあるということに気づいてください。神様がかしらとして立てた者に対して、私はあのかしらは嫌いですが、私にとってあのかしらは不十分ですと言うのであれば、それは夫に対しての問題ではなく、神様に対しての問題になります。

ひとりの注解者も簡潔にこう言っています。「従うことは、救いとともにもたらされる、クリスチャンの献身の問題です。自発的に服従の立場を取ることは、妻と夫との関係の問題ではなく、主との関係の問題です。それは『主にある者にふさわしいこと』なのです。」と。恵みによって救われ、神の子どもとされ、救われた者として歩んでいる、特にここでは妻が、自分に与えられたかしらに対して従っていくの

は、主にある者にふさわしい生き方でした。主を喜ばせていくその者にふさわしい生き方だったのです。そしてそれにノーと言うのであれば、それは主にある者にふさわしい生き方ではないということです。ですから、よく考えてみてください。いつも「従う」ということは、主の最善のご計画、神様が最初に決められたそのご計画を認めることからスタートするということです。神様が家庭のかしらとして、自分の夫を立ててくださったことをまず認めることです。その事実を喜ぶことです。神様がそれぞれの家庭にとって良いものとして、すべてのことをご存じの神様が皆さんにとって必要な者として、夫を与えてくださったのです。もちろん成長しなければならない部分、足りていない部分は夫にもたくさんありますし、みな数多く抱えているのです。でも、そうやってかしらとして与えられた夫がリーダーシップを発揮しようとしているのであれば、家族を導こうとする働きをしようとしているのであれば、妻はみずから従うことによって、その働きを助けていこうとするのです。愛と尊敬をもって、みことばの知恵や力に信頼しながら、夫の必要を満たしていこうとするのです。夫の必要は多々あります。夫の弱さも多々あります。そういった弱さを支えてあげて、神様から託されている導いていく、リードしていくという責任を、夫がますます喜んでできるようにと励まして助けてあげるのです。そして、そんな助け手としての妻の働きを、何より夫が必要としていました。そうやって主に従っていく歩みを妻が選択してなしていくのであれば、それを神様は喜んでくださり、大いに祝福してくださるのです。家庭において、夫が妻のかしらであるから、妻はその夫に喜んで従っていこうとするのです。それをほかのだれでもない、結婚を定めた神様が定めていました。それが妻のあるべき姿でした。それが従っていくことの理由だったのです。

3. 具体例：“従う”とはどのようにしてか？

さて、ここまで、従うとはどういうことなのか、その意味を考えました。従うとはどうしてなのか、その理由も考えました。三つ目に考えたい質問は、従うというのは具体的にどのようにしてかです。どうやって私たちは実際に従っていこうとするかです。本当に従うというのは、どんな姿に見られるのでしょうか？そのことを考える上で、もう一つ別の箇所を見てみたいと思います。I ペテロ3：1-4に「:1 同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。:2 それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。:3 あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、:4 むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。」と書いていました。ここもこれまでと同じように、「妻たちよ。自分の夫に服従しなさい」ということがまず求められていました。

そして、特にこのみことばは、そんな妻の夫に対する姿をこう描いていました。「たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです」と。信仰者の夫に対してであろうと、またたとえ神の福音やみことばに従わない未信の夫を神のものとするためであろうと、妻が用いる手段は無言のふるまいでした。口に出すことばではなくて、目の前で示すふるまいを、妻は夫に対して用いるのだと言うのです。勘違いしてほしくないのは、これは妻が夫の前では一切何もしゃべらないという話をしているのでもありませんし、例えばみことばや福音をことばで全く伝えないということでもありません。救いをもたらすみことばを語ることは、私たちひとりひとりに対して神様から与えられた大切な責任です。ローマ10：17にも「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」と書いていました。ですから、話すのです。でも同時にこの箇所が強調していたことは、まだ救われていない夫に対してなす妻の無言のふるまいがもたらす影響の大きさでした。ひとりの妻が、ことばではありません、ふてくされて黙っているのでもありません。ひとりの妻が何をすることも主を恐れて、いつも愛にあふれて喜んでみずからその夫に服従するという生き方を夫の前で明らかにし続けるのであれば、まさにそれこそ妻が夫になせる最大の伝道的手段になると言われていたのです。

妻が、自分自身が受けた神様からの忍耐を、口でギャーとしゃべるのではなくて、自分自身の行いでもって黙って夫に示し続けていけば、自分自身が神様から受けたすばらしい赦しというものをいろいろな形でただ示し続けていけば、自分自身が神様から受けたすばらしい犠牲的な愛というものを何も言うことなく、ただ夫の前で従順に示し続けていけば、夫はそこに何かを見る。口先だけではないのです。神様が力強く働いている生きたあかしは、まだ主を知らない者の前にはっきりと示される時に、そこに人の救いや永遠に大きな影響を与えるだけの力を持っているということです。それが、みことばが約束していることでした。未信者の夫を持っている人は、このみことばから希望を持つことができるのです。

でも、未信者の夫に対する妻の無言のふるまいが、これほどまでに大きな影響を持つのだとすれば、信仰者である妻の生きたあかしを神様が用いることができ、未信者の夫のうちに働いて、頑なな心を砕いて罪から救い出すというすばらしいみわざをなすことができるとすれば、果たして信仰者の夫に対して信仰者の妻がなす無言のふるまいというのは、いったいどれほど大きな影響をもたらすことができるでしょう。未信の夫に対してそれだけの影響を持つものが、妻がへりくだっていつも進んでみずから従うという生き方を示し続けていくことによって、どれだけ夫にとっての大きな励ましを与えることになるでしょう。果たして私たちはこのようにして生きているのでしょうか？これはもちろん妻に対して言われていることですが、すべての信仰者たちは同じようにして生きていくのです。私たち自身も受けた愛を、受けた赦しを、受けた忍耐を、周りの多くの人たちにあかしし続けていくのです。口先だけの者になるのではなく、行いをもって主のあかしを立てていくのです。

でもどうですか？妻のそういった無言のふるまいを通して、普段は夫にみずから進んで従おうとしているのでしょうか？それともことばだけで自分自身が思い描く形になるように、夫がリードしようとしているにもかかわらず、それを逆に難しくしようとしているのでしょうか？みことばははっきりと言っていたのです。もしあなたが、夫が神様に喜ばれる者として変わっていくことを望むのであれば、あなたにできることはふるまいを通して、助け手として喜んで仕えていくことです。どんな時も神様を恐れて、柔和で穏やかな霊を飾りとして、夫の助け手として歩んでいこうとするのです。もちろん、それにはいろいろな犠牲も伴うでしょう。望んだ結果をすぐに見ることができるわけでもないでしょう。どれだけあかしを立て続けたとしても、夫は頑ななままかかもしれません。私たちはそうやって頑ななものが少しの間継続してしまうと、あきらめて自分勝手な方法に解決策を見出そうとします。でもそんな時こそ覚えていてください。たとえ私たちの目に何も起こっていないように見えたとしても、神様のことばに従い続けていくことは、私たちにとっていつも最善だということです。従順に従おうとしている者を、神様は忘れていたわけではありません。いつも覚えていてくださっているということです。そして、喜んでみことばに従っていこうとする時、神様は私たちをキリストに似た者へと絶えず変え続けてくださっていて、何より神様ご自身の栄光を現し、従順な者を大いに祝福してくださるということです。

だから、視線を私たちに当てるのではなく、みことばを通して神様が何をしているのかを覚え、そこに信頼し続けることです。たとえみことばに従わない夫であったとしても、無言のふるまいによって、愛と忍耐をもって、すべての面で服従し続けていくことです。もちろんもし夫が神様のことばに明らかに反して、罪を犯すことをあなたに強要するのであれば、それはまた話が別です。私たちは何を置いたとしても、まずは主が一番です。主に仕える者として今生かされています。ペテロたちも使徒5：29で「人に従うより、神に従うべきです。」と言っていました。もし夫のその選択が神様から引き離すものであるのであれば、神様に対して罪を犯させるものであれば、それには従いません。でもそうでないのであれば、家庭においてかしらとして立てられている夫を助けていくことです。夫がますます主に喜ばれるかしらとして歩み続けていくことができるように、妻は喜んでみずから支えていくことです。それが、神様が求めておられた妻のあるべき姿でした。そうやって具体的に従っていくのです。

4. 動力：“従う”とはどこに力を見出すか？

私たちはそうやって従っていくのですが、最後にもう一つ、四つ目の質問は、どこにその力を見出すのかということです。その動力を最後に考えてみましょう。

ここまでみことばを見てきて、妻としての責任は確かに大きなものでした。大丈夫です。来週、夫を見ますから、夫は覚悟してくださいとは言いませんけれども、でも大きな責任が妻にも夫にもどちらにも与えられていました。そしてその妻の責任の大きさを見る時に、打ちのめされるかもしれません。実際に、今、夫に仕えようとしている中であって、争いや難しさを覚えている人も実際にいるのです。多くの葛藤に頭を悩ましているかもしれません。でも、そんな人はもう一度 I ペテロ 3 章のみことばに注目してください。1 節の初めに「同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。」と書いていました。「同じように」というのは何のことでしょうか？妻たちは何と同じようにふるまうことが言われているのでしょうか。その模範は、私たちの愛するイエス・キリストでした。少し戻って、2 : 2 1 からペテロはこんなふうに書いていました。「:21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。:25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。3:1 同じように……」と。改めて考えてみてください。神の御子であられるイエス・キリストは、ひどい苦しみを受けられました。私たちと違って罪を犯したことは一度としてなかったにもかかわらず、不当に扱われ、人々からののしられ、あざけられました。そして最後には何より十字架にみずからかかって、私たちの罪をすべて負って、そこで死なれたのです。ご自身の正しさを証明しようとするので赦されるのであれば、それは幾らでもできました。自分を苦しめる者に対して仕返しをし、その報いを与えることもできました。

でも、このお方はみずからそれをなさらなかったのです。では代わりに何をしていたかということ、イエス様は正しくさばかれる方に任されていたのです。イエス様は、正しくさばかれる方に、父なる神様にその身をゆだね、信頼していました。だれでもない神様のうちに力を見出し続けていたのです。妻も同じです。夫に従っていこうとする中で、困難に直面して、いろいろなことに失望してしまうこともあるでしょう。みことばの教えに聞き従い続けていくことよりも、妥協して自分の考えや思いに向かっていってしまいたいと思うこともあるかもしれません。でも、そんな時こそ神様のうちに力を見出し続けることです。身をゆだねて、助けを祈り求め続けることです。神様、あなたが私に夫を与えてくださいました。彼は私のかしらです。あなたがそうしてくださいました。今の苦しい状況は私には理解もできませんし、これから先どうなるかわかりません。でも、あなたに信頼してみことばに従いますと。そうして祈り、助けを求めながら歩いていくことです。

また同時に、イエス様のへりくだりの犠牲をいつも覚えることができます。ここに書いていました。イエス・キリストは十字架の上で亡くなりました。イエス・キリストの十字架を表面上だけ見てみれば、確かにひどいものでした。弟子の一人は自分を裏切って十字架へと引き渡し、ほかの弟子たちも一番必要なタイミングで恐れ戸惑って、逃げて行ってしまったのです。十字架の敵意や痛みというものも想像することもできないほどひどいものでした。このものを考えたときに、私たちには最悪としか思えないようなものを通して、神様はご自身の栄光を現されたのです。確かにキリストの死と復活のみわざを通して、救いの御業を完成させられました。どう考えても、私たちには光が見えないような暗闇の中であったとしても、神様はご自身の光を、栄光を輝かすことのできる力あるお方でした。そんな神様の力に抛り頼んで、この方の立てたご計画に従い続けていくことは、私たちにとって最も素晴らしいことではないでしょうか？

ですから、妻として歩まれている皆さん、皆さんが妻として、助け手として、夫に喜んでみずからをささげていくというその生き方は、神様ご自身が定められた高貴な務めであって、大きな責任だということです。そして主にある者にふさわしい歩みでもありました。ですから、続けて忠実にみことばに従って歩んでください。その歩みは確かに難しさを伴うでしょう。でも、その歩みを通して、神様ご自身の栄光を現されます。助けも神様はいつも与えてくださいます。そのように歩んでいくのであれば、神様が何よりもいつも喜んでくださるのです。

夫として歩まれている皆さん、きょうの帰りに妻を問い詰めるのではなく、自分のこととして改めて考えてみてください。神様はリーダーとしての役割を皆さんが果たすために、夫に必要な助け手としての妻を与えてくださいました。必要だから与えてくださったのです。だからこそ、妻が自分から進んで自分自身をささげようとしているのであれば、夫はそれに感謝することです。その働きがあなたにとって欠かせないということです。そしてその働きを妻が喜んでなし続けることができるように、夫は愛をもって励まし、導いていくことです。

そして最後に、こうして私たちは妻としての責任を見てきましたけれども、みことばは私たちにはっきりと教えてくれています。信仰者であるなら、すべて私たちは主に従っていく者だということです。その責任をひとりひとり持っています。もしまだこの主を知らない方がいるのであれば、自分の罪のために死に、十字架にかかってくださった方の十字架を求めてください。この救い主イエス・キリストを自分の救い主として、主として求めてください。この方の前に悔い改めて、この方のために生きてください。でも、もし今救われて信仰者として歩んでいるというのであれば、私たちは何よりも主に従っていく人生を生きています。キリストのへりくだりと従順によって、罪から救い出された私たちは、従順な者として生きていこうとするのです。ですから、みことばに耳を傾け続けることです。世の中にはいろいろな間違った教えがあります。そのようなものに耳を傾けるのではなく、すべてを最初から造られた神様のご計画に、ただ耳を傾け続けることです。それに従い続けることです。そして神様にへりくだって仕える者として、ともに成長し、栄光を現し続けていきましょう。